琵琶機関紙
京絃
第二八六号　京絃社

琵琶と私

京都　馬場　鴨水

お彼岸ももうすぐですね。空の色もやや和みて見えます。

「晶然として咲き出づる白梅は、寒の生める花なり。」と言われています。きのうは幸いにも北野神社に参拝し、白梅のはやも凋みて紅梅のくれないの蕾をしずかに歓賞することが出来ました。

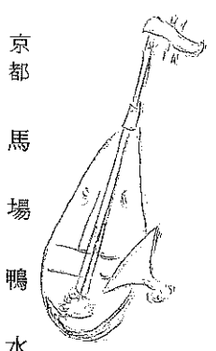
古筆で有名な関戸古今集に

「ちりぬとも香をだにのこせうめの花こひしきときの思ひ出にせん。」と、伝行成筆に見入るこの頃です。

春といえば藤村の「春の曲」を思い出します。「うてや鼓の春の音　雪にうもるる冬の日のかなしき夢はとざされて　世は春の日とかわりけり。」の一節を口ずさみながら。

また「長安早春の旅懐」白楽天の詩も楽しい。（訳詩）

楽の音や車馬で賑ぎわう雑踏に
ひとり背をむけて僕は立つ



旅愁の夜はすだれをあげて月をながめ
淋しい日暮独りふるさとを想って涙ぐむ
早春の風に若葉がそよぎ
春雨はしだれ柳の緑をぬらす
ああ　春にそむいた苦学の日々よ
愁いは今なおつきぬままいつしか僕も
分別顔した三十男になろうとしている

三十才代の作品、叙情詩に親しむのです。

風のない日には私は独り高野川辺りを歩きます。日毎にふくらみを見せようとしている桜をながめています。時に詩を吟じ、琵琶を歌って寂寥を慰め、また錬磨のひとときをと意欲に燃えたちます。

去る正月二十五日、老寿会に下鴨神社内で満堂の舞台を踏んで演奏しました。昨年は石童丸、今年は白虎隊、来年もお願いしますと司会者の最初の挨拶。

会員の大部分は老年で、なつかしい琵琶演奏に謹聴しておられ、楽しい雰囲気の中の一曲は老人たちを楽しませたことと思いました。

かかる演奏は私にとって心を揺り動かす感動で、琵琶芸道それは古典音楽独特の世界でもあり、私にとって生きゆく人生に喜びがあふれていると言えるでしょう。

世阿弥、風姿華伝書に曰く。

「芸能とは諸人の心を和らげて上下の感を成さんこと寿福増長の基、返令延年の法なるべし。」とまことにうれしい言葉です。

とは言え、芸道はどこまで行っても際限がないでしょう。松田静水先生が宗家錦心先生五十年祭に際し、故宗家先生は実に清く正しい芸術家であられたと、故師の偉大なる風格を偲ばれた記事を拝見しました。

幸いなるかな。私は先輩同輩たちの恵まれた環境の中で、或るときは演奏者の一人として、また聴衆として指導を仰ぎ、一歩ずつ高く眼前が広くなりゆくを覚えるのです。

さて琵琶名流会第一回が迫まり、心おちつかず動揺していますが力一ぱい表現したいと思いを会場に馳せています。恐らくあの広いホールには心をはずませての楽しむ聴衆で一ぱいになることでしょう。

つぎに私の琵琶考察の一端を掲げて自らの反省といたします。

1. 選曲について

○名曲としてなつかしまれている曲を第一に愛す。

○文学的な曲は古典への世界に導入されて貴い。

することに決議し八時半閉会解散した。

晴風会弥生演奏会

三月十一日(土)夕六時東京杉並区高円寺会館。模範演奏旅ー会長浅野晴風▼城山ー佐藤▼桜狩ー竹内▼屋島の誉ー大田尾桜風▼吟我日本を愛すー伊藤香風▼噫八甲田山ー中山礼風・諸遊清風▼橘大隊長ー本橋錦颯▼仁科信盛ー野口嶮水▼菅公ー望月啞江▼小栗栖ー福島振水▼大物の浦ー大関英子▼三方ヶ原ー高田栄水▼羅生門ー杉山旗水▼茨木ー山下晴楓。九時閉会。

女流各派琵琶演奏大会

三月十二日(日)正午名古屋中小企業福祉会館、主催阿部久子女史。売花翁ー東京前田秋声▼本能寺ー奥村慧水▼河中島ー横浜采崎統水（以上応援出演）▼金剛石ー四人▼母の教ー二人▼蓬莱山ー二人▼春日野ー二人▼七卿落ー山本▼菅公ー久保田▼月下の陣ー松浦▼城山ー長谷川▼桜狩ー山田▼北の庄ー応援水野旭麗▼銀香の小陰ー同今泉旭玲▼川中島ー同前田絹水▼小栗栖ー同土井旭浄▼白虎隊ー同横須賀小関香水▼常盤御前ー会主阿部久子（勝水）▼（以下来賓）吹雪の敵ー横浜座間姣水▼西郷隆盛ー名古屋石河旭豊穣▼横笛ー大阪中山鳳水▼堅田落ー東京原島旭粧▼彰義隊ー同仲川秀邦▼義士の本懐ー同押田旭窮。

木犀会第三回演奏会

三月十六日(木)夕六時半東京芝公園前ABCホール（千円）。①琵琶独奏ー五絃楽琵琶王昭君、薩摩琵琶門琵琶、崩れの曲。②雅楽平調、音取り外。③箏尺八合奏春の夜。④錦心流琵琶鉢の木。⑤かや琴春夢。⑥箏合奏箏双重。⑦一絃琴、七絃琴須磨・酔漁唱晩。⑧邦楽合奏白鷺の幻想。以上、出演者普門史城氏外十二人。

ラヂオ琵琶放送

○三月二日(木)夜十時二十分NHK・FM「邦楽百番」で本能寺ー平山真佐子、扇の的ー笹川旭鳳両女史放送

○三月九日(木)昼三時十分NHK・FM、湖水乗切ー村木桜柳、安達ヶ原ー鈴木流泉両氏放送

（予　告）

○…京都琵琶協会四月例会　四月二日(日)昼一時、本部平井春嶺氏宅。例会のあと本年度総会開催のため全員練合せ出席のこと。

○…都派琵琶錦穂会春の公演　四月九日(日)東京上野本牧亭（会主都錦穂女史）。なお秋の公演は十月六日東京銀座ガスホールで開催の予定。

○…錦びわ春季演奏会　四月二十二日(土)昼東京日本橋証券ホール（全主水藤五郎氏）。

○…各流派琵琶名流大会　五月六日(土)正午東京日本橋証券ホール、日本琵琶楽協会主催（千五百円）

○…菊水流吟詠吟舞大会　五月七日(日)昼東京浅草公会堂。琵琶鈴木流泉氏応援出演。

○…錦心流琵琶演奏会　五月二十五日(木)昼東京上野本牧亭（会主杉山旗水氏）。

きがとあ

毎年二月二十八日から十四日間謹修される奈良東大寺二月堂のお水取り、続いて近江の比良八講が済むと関西には本当の春が来る●今冬は暮れの十二月から一月にかけての暖冬異変でわれわれ庶民は大いに助ったが、二月半ばから三月初旬の物凄い寒冷に襲われて思わず縮みあがった●でも四月の声を聞けば花笑い鳥唄い、寒からず暑からずの文字通り〝わが世の春〟で、待ってましたとばかり琵琶界も活気を呈しよう●各位の御活躍を期待する。

昭和五十三年四月一日発行（非売品）
編集者　植村寞水
発行所　京絃社
〒569　高槻市津之江北町一一ノ二三
電話　〇七二六(七三)六〇五一番

○愛吟集の中には名曲がたくさんある。
○新作また楽しい。
2. 演奏時間は十五分程度で長い曲の縮少。
3. レコードやテープの鑑賞。
4. 弾法の練習は大いに楽しい。
5. 詩吟独自の練習も楽しい。
6. 歌詞は一語一語明瞭に発声練習すること。
7. 内容に即した歌い方、平板であってはならない。流祖のあの繊細華麗な曲風を慕うのである。

正月早々琵琶一面手に入りました。東京で修理してもらい、毎日楽しんで弾いています。大へん弾き易く、音色も気に入りました。この琵琶に引きつけられているような日々です。同好の皆さん。よろしくご指導下さい。

（付）
高野川流るる水を眺めつつ
今日も励みて琵琶高らかに
（亡妻の詩帖の中から）
（五三・三・六）

寸言 (39)

山椒太夫　森欧外作〝安寿と厨子王〟の悲惨な物語。厨子王は後に丹後の国主に出世し山椒太夫を死罪に処しどれい達を解放する。京都府宮津市の由良川口近く「山椒太夫遺跡」の標柱が建ってある。

戦国時代の女性（一）

ばくすい

雪は笠椽にそそぎ　風袂を捲く
孤々乳を求むる　いかんの情ぞ
他年鉄拐峯頭の嶮（ひよどり越えの意）
三軍を叱咤するは　これこの声

幼ない三児を抱えて、降りすさぶ大和路の雪中を、当てもなくさまよう薄幸の佳人常盤御前ー詩は梁川星巌の名作である。

常盤御前は九條院（近衛帝の皇后）に仕える雑仕女であったというほか、その出世地や氏素性など全く記録に残っていない。ただ眉目麗わしい絶世の美女で、当時権勢をほこった源義朝と平清盛が張り合って、結局義朝の側室となったのであるが、その時常盤はまだ十五才の西も東もわからぬ少女であった。

常盤の人となりについては色々の見方があるようで、たとえば、地味で几帳面で、三人の子供の幸福のために、己れ自身はその犠牲になった女性の亀鑑、という人や、多情で節操なく女性の官能の赴くままに淫奔な半世を送ったという人など様々であるが、少くとも戦国時代の女性は、例外を除いては男性の従属物として奴隷的な生涯を送らざるを得なかったことは確かなようで、男女同権を主張する現代の若人たちには到底想像も及ばぬ時代であった。

ここに文筆家、作家の二人が書かれた、見方を異にする〝常盤御前〟の文章の一節を引用して参考に供したい。

○

常盤御前は源平盛衰のさなか、源義朝の父為朝、平清盛の父忠盛の時代から、保元・平治の乱を経て頼朝・義経の挙兵後まで、源平の治乱興亡盛衰の激しかった時代、か弱い女の身で両氏の首領に愛されながら、しぶとく、たくましく生き抜いた一女性で、美人に生れたばかりに源氏の統領義朝に愛されてその妾となった。そして争い相手平清盛に未練を残さしめた。

これが平治の乱後義朝ら源氏一門の敗戦のあと、今若・乙若・牛若の三児を抱えて、安住の隠れ家もない追求の逆境の身が、却って敵方清盛の愛をよみがえさせて自分も救われ、男ばかりの三児の命も救われる結果となったもので、常盤の運命は余りにも数奇に満ちていた。

兵乱が終り一時でも小康状態が訪れると、武家達は忽ち漁色に走る。義朝も官女、武将の娘達を物色して百人を選び、その中から十人をよりすぐり、更に十人の中から一人を選び抜いたのが九條院の雑仕女で、葉隠れの人目を避けてひそやかに楚々と咲いた名花一輪の常盤であった。これを聞いた清盛は、あき

らめ切れぬ未練を残してこの女色争いから身を引いたのである。

その後、時は移り変って、保元の乱には味方同士だった義朝と清盛は、三年後の平治の乱には仇敵の間柄となったが、常盤は既に今若・乙若の二児に恵まれ、義朝との仲もむつまじく幸福な生活を送っていた。

常盤御前は、質素なつつましやかな生活を好む女性であった。当時の上流貴族や武将たちは、下民の血と汗によって生み出された富を搾取し、民の苦労などは念頭になく日夜酒宴や詩歌管絃の遊蕩にふけっていた。常磐は自分の地位を利用して上層社界に出入し、栄養栄華の毎日を送ろうと思えば出来たのであるが、それらの社界とは没交渉で質素な生活を好み、義朝の身の廻りや子供達の養育に全精力を傾けていた。こうした心掛けの日常生活に対する態度が、平治の乱後襲いかかった逆境に、闘い耐える素地を造っていった。

常盤はそのとき三人目の子を妊っていた。安産祈願のため日夜附近の常徳寺に参詣し、やがて月満ちて無事男児出産、これが後年稀代の名将として平家討滅の偉勲を挙げた牛若丸、つまり源九郎義経である。

牛若に反して今若・乙若の二人は平凡な市井人で、傑出している点は毛頭なく、二人とも清盛のため僧門に追いやられ、逆境に育って苦悩の毎日であったことは認めるが、源家の血統を引く武将としての素質は皆無で、政治的な才智行動なども全くない。

元来、源氏の統領には頼朝、義家らを除けば大した人物はなかった。義朝にしても一介の武弁に過ぎない朴直な武将で、自分の性能を深く考えるでもなく、権謀術策の渦巻く智のうを誇る藤原公卿たちの紛争に捲き込まれ、武将というより政事家的素質の優れた清盛相手に戦うなど愚挙の骨頂で、負けるべくして義朝は負けたのであり、清盛は勝つべくして当然の帰結として勝ったのであると云い得る。時代を同じうして清盛と並び立ったことが、義朝の不幸であり不運であった。

今若、乙若の二人も源家再興には何等力となっていない。弟牛若とは比較にならぬ劣等児揃いで、彼等の末路は哀れであった。義経の大活躍や平家討滅前後の激動期にあっても、何一つ行動らしい事はしていない、寧ろ源家の噂など自分から避ける風であったのみならず、切実に深刻に考えさせられることは、実の母常盤を避ける気配があったことだった。一身を犠牲にして幼い自分たちを守ってくれた母常盤の、言語に絶する苦労恩義を感じていないような言動があった。

「仇敵清盛に身を任せてまで自分達三幼児を救って呉れとは希いもしない、父祖をはじめ源家一族も喜ばないし容認もするまい。」と円済（乙若）などは理屈を並べて自分の行動を理論づけ、正当化しようとした。

ー栄枯盛衰は織りなして、三男牛若の無事安産を洛北常徳寺の地蔵尊に祈願し、後年の天才的戦術家義経を産み落し、何一つ不自由のない常盤御前の幸せも長くは続かなかった。

源平二氏の共存共栄は理想論であって、武将としての風格、大度量、勢力、才幹のあまりにも大きな開きは、保元の乱後の論功行賞も手伝って遂に平治の乱を招き、源氏の敗退となり常盤御前の幸福は、秋の木の葉のようにはかなく吹き飛んでしまった。時世の推移や変遷から観じ来れば、栄華も凋落も一瞬の夢で、「この君なくば」と源氏一族の郎党旗本から頼み仰がれていた義朝も敗戦の苦渋に泣いた。洛北紫竹今宮にあった豪華な邸宅も、兵火のため跡かたもなく焼失してしまう。

安住の地を失った常盤は、忽ち幼児三人と共に路頭に迷う悲惨な立ち場にたゝされた。〝有為転変の世の中〟とは、まるで常盤のためにつくられた言葉である。

平治元年末、夫義朝は再挙を父祖の多年培って来た東国に求めんと、逢坂の関を超え近江路をさすらい、吹雪の夜伊吹の峰指して尾張路に落ちて行く。そして本妻との間に出来た三男頼朝を残したまゝ、義朝一族は家来筋の長田忠致のため非業の最期を遂げる。

常盤は、仇敵平氏の我が物顔にのさばる京洛の天地に潜居していたが、六波羅探題の追及きびしく遂に荒ぶ吹雪の夜、二才の牛若をふところに、四才の乙若、六才の今若を両手に引いて、仏陀の情に縋らんと路頭に迷うのである。

平治の乱後程なく、常盤親子の身柄は六波羅問注所にあった。恩愛一かたならぬ常徳寺

へ後難のかゝるのを怖れ避けて、進んで自首したとも、又捕えられ引かれて行ったとも、巷間の諸説は区々だが何れも史実に根拠なく、推測の域を出ないようだ。

六波羅問注所での訊問は異例を以て清盛直々で行われ、常盤は放たれたが幼児三人は僧籍に移されることに決った。思いがけない清盛の温情に、身を以て謝意を示す常盤の眸と、ゆくりなくも義朝と常盤を争った往時を偲ぶ清盛の眸とは、途中で絡み合った。三児の母となったとはいえ、常盤は未だ二十三の若さで、不運と逆境に泣き濡れた常盤の魅力は、若い女の持つ妖しげな美しさに満ち、子を設けてから却って磨きがかゝったように、妖艶な美しさを増していた。

常徳寺での常盤の潜居は釈放後も長く続いた。そして〝女人の哀しき定めか〟清盛の愛を図らずも受ける身となり一女児を生みおとした。そうなったいきさつは、六波羅問注所での清盛の苛烈な、義朝の追求に対し、「夫義朝の行方は全然知らぬ。お情けに三児の命を助け給え。妾はいかようになっても厭わぬ」と常盤は答えた。三児の生命の安全と引きかえに、女身を委ね敵方の武将のいけにえに供えたのであった。

戦国の治乱興亡のさなかにあって生き抜きつゝ母性の貴さ強さを身を以て示し、己が身を犠牲に供して三児を救った。その遺児はやがて成人し、仇敵滅亡に偉勲を樹てる。こんな女性は歴史上かってその前例を見ない。

善光寺と川中島

辻　旭城

信州信濃の善光寺、と云われるように、長野県と善光寺は切離しては考えられない。

善光寺は信濃の名刹で有名であるが、善光寺がいつごろ建てられたということについては、どの文献を見ても不明である。一説によると、奈良時代の前期であるともいわれているが、兎に角、古い時代に建てられたのは間違いない。また善光寺の本尊は阿弥陀如来であるが、この像を誰も見た者はいない。

秘仏だということが、なにかしら神秘的な雰囲気をただよわせながら、善光寺を訪づれる善男善女の信仰の対象として、厨子の奥に納められている。従って、美術の対象となることもない。

善光寺は、その建立以来幾多の歴史のなかに登城する。歴代の武将、とりわけ鎌倉幕府の頭領であった征夷大将軍源頼朝、執権北条時頼なども深く善光寺を信仰した。戦国時代の英雄甲斐の武田信玄は、御本尊を甲府に移してここに善光寺を作った。また織田信長、徳川家康や豊臣秀吉らも御本尊を自分の身近に迎えた。

信濃は信仰の地であると同時に商業も盛んで、宿場でもあった。その規模の正確な数字はわからないが、水茶屋が三十軒以上もあり、二百数十人の遊女を置いたというから、予想外に大きなものであったことがわかる。各地の大名が宿泊する本陣も、一流の水茶屋が何軒かでつとめたというし、明治十七年の頃の記録では、年間の宿泊者が七十余万人、このうち善光寺参詣者は三十余万人で、その外は全国からの商人が主であったという。

筆者は数年前善光寺を訪れた。お寺の附近は昔の面影をまだ残している。本堂は宝永四年（一七〇七）に完成したもので、建坪は大和の東大寺、京都の三十三間堂についで第三位の広さをもっている。

山門は寛永三年（一七五〇）、経堂は宝暦九年（一七五九）、仁王門は大正七年、鐘楼は寡永六年（一八五三）の建造である。

近頃ブームになった川中島古戦場は、古くから講談や時代小説などの舞台に登場して来て有名だが、イメージはそのままにしておいた方がいいくらい変りばえのしないところである。大きな合戦の行われた平地に、きわだった史跡を求めるのは困難で、余程の感受性に強い人でない限り無理である。

川中島合戦は、日本の戦史に残る名勝負といわれる。最近はマスコミの影響で川中島ブームとなり、〝川中島古戦場〟は一躍、観光地としてのしあがったが、驚いたのは地元の人たちで、春、秋の行楽シーズンに、盛んな

ときはバスが数十台も続いて、川中島というデルタ地帯に乗りこむ壮観は、まさにゴールドラッシュの光景だという。川中島の戦は、今や歴史という事実の上に成り立ったものではなく、虚構を売りものの講談や時代小説によって作りかえられてしまった。

川中島の戦と人々が呼んでいるのは、永禄四年（一五六一）九月十日の激戦のことで、それは甲斐（山梨県）の守護職武田信玄と、越後（新潟県）の守護代（当時は関東管領）上杉謙信の一戦である。信濃国全部を掌握していた武田信玄に対し、越後から打って出た上杉謙信が川中島で戦闘を交えたのは事実であるが、八幡原での両雄の一騎討ちというのは一種の物語に過ぎないようで、このような話が作られるほどの激戦であったということであろう。

これを今少し詳細に説明すれば、これまで川中島を戦場にして武田、上杉両軍の小ぜり合いは数回あったが、両軍が激突したのは永禄四年九月十日だけで、そのため殊更伝説化されてしまったのであろう。

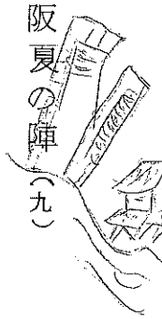
越後から出陣した上杉軍に対し、自分の領地信濃で防戦した武田軍の客観的状勢が伝説となって、斬りつけたのが侵略者の上杉謙信であり、防響の姿勢そのままで受太刀となって危険を回避したのが武田信玄である。

何れにしても川中島で激戦が行われたのは歴史的な事実で、そのために多くの人が死亡し、沢山の犠牲者を出したかは計り知れず、善光寺もその被害者の一員で、目ぼしい物は皆持ち去られたという。川中島合戦の裏には、いま人々のブームの蔭に、庶民の哀史を永遠に秘めている。

信州は自然と史蹟に恵まれた美しい土地で、この地を隈なく歩きたくなるのは当然である。われわれに馴染の深い上田城もその一つ。関ケ原の戦や大阪城の防戦で、豊臣方にあって大活躍した名将真田幸村の居城は、千曲川を眼下に上田市の繁華街のはづれに建っている。素朴な小じんまりとした城がそれである。

大阪夏の陣（九）

山川流水



元和元年（一六一五）四月二十二日、関東方は京都で大阪攻撃の作戦会議を開いた。

藤堂和泉守高虎が「大阪の兵が多くても大名は参加しない。関東勢が勝つのは分かり切っているが、急いで攻めると失敗するかも知れぬ。集結したわが軍が京都附近で待機していると、敵は焦って出撃して来るに違いない、そこを一気にたたけば勝つ。」と進言すると、家康は攻城戦よりも野戦が得意のためこれを採用、全軍を二分して奈良経由の大和口方面軍と、枚方廻りの河内口方面軍に分け、道明寺（藤井寺市）で合流、大阪城を南方から攻撃することに決定した。

二十六日、大雨の中を河内口の一番手、藤堂高虎と大和口の一番手、水野勝成が出発する。家康、秀忠の本陣は二十八日、河内へ向うことにしていたが、大阪方の京都焼打ち計画が発覚したり、あだ討ちで殺された大津の代官が大阪内通の手紙を持っていたなどの事件があって出発は延びる。しかし軍勢は二十八日出発開始、本陣の現地到着を待った。

一方、大阪方でも樫井合戦で破れたあと四月三十日、城内で作戦会議が開かれ、後藤又兵衛が主張した。「大阪城は総堀ばかりか三の丸、二の丸の堀まで埋められて防衛線がない。平原、広野で敵を迎え戦うと、野戦が上手な家康に率いられる関東の精兵を相手にして自信が持てない、さきごろ七手組の隊長諸君は、城南から敵の攻撃を予想して天王寺で迎撃しようと意見具申をしていたが、自分は不賛成である。敵は必ず大和路から来る。大阪の劣勢な軍隊で敵の大軍を防ぐには〝険に拠って戦う〟のが最高の策だ。生駒、葛城山系の峠を越えて来る敵を、国分（柏原市）の狭い地点に迎え、戎が精鋭を集結して戦えば十中七、八は勝てよう。敵の先陣を撃破したら、後続の敵部隊は奈良、郡山まで直ぐ退却するだろう。それを立て直して再び来襲するには又日数がかかるから、そのとき又次ぎの計画を建てる。」

真田幸村も木村重成もこれに賛成した。そ

して大野治長が秀頼に報告して大和口迎撃に決定し出動部隊を編成した。

先手は後藤又兵衛、薄田隼人、明石掃部らの率いる六千四百人、本隊は真田幸村、毛利勝永、渡辺糺らの兵数約一万二千人とし、先手は五月一日平野郷（大阪市平野区）に設営、本隊は四天王寺の廻りに陣を敷いた。

大阪軍記は「徳川方の今度の大阪攻めは一方攻めに力攻めにしようという。既に大阪城は裸城だから北には余り向わない。淀川、神崎川など川が入りくんで攻め憎い。大和川も昔は南方へ切れ込んでいたから、東の方は沼だらけである。関東方の二つの方面軍は道明寺附近で合流するだろう。従って夏合戦は道明寺、玉地山が随一の激戦地となった。」

道明寺国分は豊臣領の東南端で、大和からは大和川添いに亀瀬峠を越えて来る現在の国道二十五号、大和高田から近鉄大阪線沿いに関屋峠を出て来る国道百六十五号が国分で合流、片山村（柏原市）から石川を渡り、道明寺経由堺へと街道が続く。

夏の陣は旧暦五月、雨期である。関東勢の河内方面軍も大阪城東方の河内湿地帯を避けて、生駒山麓の高野街道を道明寺に集結せねばならぬ

五月五日（旧暦六月一日）家康は「三日間で大阪は落城じゃ」と二條城を出発、夕刻に河内星田（交野市）に到着、秀忠も同日伏見城を出て河内砂（四条畷市）に布陣した。

その夜、家康の本陣に大阪城に入れておいた隠密から情報が届いた。「後藤又兵衛軍が六日道明寺へ出撃、外の大将たちも出撃の準備中。大阪城の東方は川が多く道の両側は湿地帯で人馬の進退も不自由で、大阪方も道明寺筋へ出て来るのが当然。」と進言して来た。

家康は河内口先陣の藤堂高虎と井伊直孝に「六日、道明寺に先行し大阪方の出撃を阻止せよ」と命令、藤堂勢は千塚（八尾市）、井伊勢は薬音寺（同）まで深夜の生駒山麓の高台の道を南下して夜営したが、未明は烈風雨で当時の河内湿地帯の模様が想像出来る。

四十七士 うどんも食べた最後の食事

志賀　一

「赤穂浪士が切腹の前に食べた最後の食事は二汁五菜だった」「討入りで死んだ吉良上野介の家臣清水一角は全身三ケ所に傷を受け台所に倒れていた」など、浅野四十七士の吉良邸討入り前後の史実を詳しく記るした実録忠臣蔵ともいうべき古書「浅野義士伝」が岐阜市内の民家の書庫から先般見つかった。鑑定を依頼された岐阜市史編集室では「四十七士の討入りを扱った古書は多いが、浅野義士伝という表題は初めて見る。江戸時代中期に原本から書き写された写本らしい」という。

内容は、浅野内匠頭が江戸城内で刃傷事件を起こし、赤穂藩が取りつぶされたところから始まり、元禄十五年の四十七士吉良邸討入り、切腹、高輪泉岳寺に葬られるまでが史料に基づいてくわしく書かれている。

この中で特に興味深いのは、吉良邸討入りの際に吉良側の多数の家来たちが受けた傷の数と死んだ場所が、いちいち書き記されていること。それによると清水一角の外、小林平八郎は十八ケ所の傷を受け座敷で死んだとある。

また、四十七士が切腹の前にとった最後の食事は二汁五菜で、うどんも出たこと、義士の身柄を預けられた各大名が、義士切腹後お金を出し合って墓をつくったことなども描かれており、興味深い。

「浅野義士伝」が見つかったのは岐阜市上川手鈴木稔さん方。家を改築するため、十数年前に亡くなった父富之助さんの蔵書を整理中に発見された。

毎号連載好評の「我が道を行く六十五年」は執筆者西郷天風氏微恙のため本号は休載します。あしからず御了承下さい。
―係―

第一回琵琶名流会

昨年発足した日本琵琶楽協会関西支部主催の首記が、既報の通り早春三月十一日(土)、十二日(日)の両日午前十一時から京都市烏丸夷川上ルの京都商工会議所ホールで開催された。会場は市の中央に位置し立派な舞台を持つ椅子席の三階大広間で、適度に暖房を利かせた心地よいホールである。

〃関西支部〃は滋賀、京都、大阪、兵庫、岡山、鳥取、四国四県を包含する各派琵琶人を以て組織され、第一日十九曲（内二人病気欠演）、第二日二十曲（内一人病気欠演）の薩摩、筑前、錦心流各派の男女名流が、左右に数基の花輪を飾り金屏風を背景にした壇上で覇を競ったが、奏者はその名の通り何れも一騎当千の名手揃いでそれぞれの特技を遺憾なく発揮して名演奏を披露し、ほぼ満員に近い三百の椅子席で静聴するファンは四時過ぎの終演まで席をたつ人も殆んどなく琵琶楽の真髄を追求してその醍醐味に浸り、全演奏が終ってもまだ名残り惜しげに立つのをたじろぐ様子を呈するなど、この演奏会は極めて充実且つ盛会裡に終始し成功をおさめた。（入場料両日共各千円）。

尚この催しに祝意を表するため東京本部理事長藤巻旭鴻、同顧問鈴木誉士の両氏が態々西下、出演者を激励された。

（第一日）錦の御旗ー四日市山本嶺舟▼高松城ー京都田中鵬水▼弁の内侍ー大阪伊勢谷安江▼薩摩の乙女ー京都山崎旭栄▼安宅の関ー京都中島旭穂▼加茂の春雨ー高槻植村寞水▼源実朝ー大阪菅旭香▼竜の口ー城陽木下皇水▼粟津ケ原ー京都矢吹旭美津▼白虎隊ー京都馬場鴨水▼北の庄ー神戸久徳旭蘭▼伽羅の兜ー明石富樫旭桂▼吉野落(二)ー大阪岡部錦蝶▼関ケ原ー大阪横野旭凰▼堅田落ー向日梅原旭濤▼時は今也ー京都平井春嶺▼茨木ー高槻山崎旭萃。（抽籤による出演順）

（第二日）吉野山懐古ー大阪川上琵水▼綱館ー伊丹西沢旭朗、神戸平田旭甫▼秋風故郷の山ー大阪岡本旭村、京都清水旭翠▼桶狭間ー京都牧南水▼小栗栖ー大阪高千穂旭楓▼那須与市ー京都国友旭香▼菊水の旗ー豊中反町紫水▼鴨川の露ー羽曳野島田旭千▼井伊大老ー西宮楊嶽水▼能州行ー松山白石旭優▼本能寺ー徳島内田欽水▼西郷隆盛ー半田三輪花水▼新撰組ー向日相良旭蟬▼大楠公ー神戸大迫旭山▼鉢の木ー守口小川吟水▼都落ー彦根林田旭城▼楊貴妃ー西宮三浦蓮水▼若き敦盛ー神戸柴田旭堂▼対王丸ー東京藤巻旭鴻。（抽籤による出演順）

柏会・旭登会合同の二月例会

日本芸術琵琶柏会・筑前琵琶旭登会合同例会が二月十九日(日)昼東京西新宿の柏ビル六階で開催され門琵琶外弾法ー錦幽▼掛合茨木ー杉山旗水・高田栄水▼俊寛(上)ー坂入俊風▼月さくらー山崎錦幽▼白虎隊ー青木早水▼未練西行ー若宮旭登▼吹雪の敵ー山田洲鳳▼敦盛ー栄水▼平家都落ち朗読ー雨宮映月。以上研修の後小宴に移り七時散会した。

道明寺梅花祭に琵琶献奏

二月二十五日(土)昼藤井寺市の道明寺で開催、大阪琵琶同好会主催。吉野山懐古ー安光▼義家ー島津旭都▼石童丸ー米原旭智▼伏見の吹雪ー馬部▼花の白虎隊ー多和▼大高源吾ー末広社中▼衣川ー松林▼湖水渡りー矢野旭信▼城山ー中内▼別れの国歌ー杉木▼大楠公ー作花旭友▼彰義隊ー野々村▼神崎与五郎ー光旭仙▼若き敦盛ー寺尾旭吉栄▼衣川ー水谷旭甫▼羅生門ー入江▼茨木ー東▼二〇三高地ー中内▼菊水の旗ー田中歓水▼青の洞門ー辻旭城▼安宅の関ー石橋旭嶺▼小栗栖ー中山鳳水▼大石主税ー天津八千代。外に詩吟、舞踊、奇術など数番で視聴者を喜ばせた。

京都琵琶協会の三月例会

ようやく春めきそめた快晴の三月五日(日)昼本部平井春嶺氏宅で開催し夕刻まで研修演奏、馬場鴨水ー白虎隊▼田中鵬水ー桜井の駅▼野田彭水ー敦盛▼矢吹旭美津ー湖水渡り▼山岡旭清ー石童丸▼牧南水ー桶狭間▼桜井旭富ー井伊大老▼平井春嶺ー常陸丸▼飛梅の幻想ー植村寞水▼時間の都合で演奏なしー戸田旭公、梅原旭濤、安住旭康、荒木旭媛、水内媛水以上各氏出席。夕食を共にしながら芸談などの一刻を過ごしたあと曩に起草された協会々則の内容につき詳細討議して創案をまとめ之を四月の総会に於て全会員に諮った上正式発表